

## 対談：武田功 × 鳥原学

主張する雑居ビル

事務局：3会期目の武田さんです。まず今回の作品について、お伺いしていきましょう。

鳥原：このシリーズは、いつから撮り始めたんですか？

武田：昨年末くらいから。展示するものは、ほとんど今年に入ってから撮ってますね。

鳥原：写真を見ると、結構強く影が落ちてるじゃないですか。選考会では、それをもっと拡散してフラットな感じにした方がいいって話もあったんですが、それはどう思われます？

武田：うーん、結局のところ、撮影した時間帯が大体一緒で、昼過ぎくらいに始めて、冬場に撮ったから三時くらいまでしか光がない。その中で選んでいったら、こういう影の強いものが残ったんです。ただ、やっぱり影があることで、自分が見たい所がスバッと入ってくるので、意識的にそういう切りとり方をするかもしれないですね。

鳥原：今言われた、「見たい所」というのは？

武田：やっぱり、色が点在している所ですね。昔は建物にこんなにガラというか、色はなかったと思う。出張で地方に行くと、駅前の雑居ビルに消費者金融の看板とかが集中して出てるのを見て、ケバイなあと感じてたんですね。で、東京に戻ってきたら、やっぱり同じような感じで。それで何か気になって撮り出したんですね。原色が入ってる光景に結構惹かれるんですよ。人に言われたことがあるんですけど、人物のスナップ撮っても、写ってる人は必ず黄色とか赤の服着てるよね、と。だから、始めは割とデザイン的な目で見てるのかもしれないですね。

鳥原：なるほどね。タイトルの「toy city」というキーワードは後からつけたんですか？

武田：後からですね。ある程度まとまってきて、これって何かになって、つらつら考えてるうちに、ぽっと出てきたんです。見ていて、やっぱりおもちゃっぽいよねと。

鳥原：日本の建物の場合、10年くらいで建て直すとか、仮設っぽい建物とかもあるし、どんどん変わる。そういう風景って、とても今の日本的な風景だなあという気がしますね。撮ってるのは、山手線の駅前ですか？

武田：うん。セレクトしているうちに、結果的に東京の中だけになってしまいました。川崎とかその辺も撮りに行ったんですけど、やっぱり微妙にあわないような印象があって。

鳥原：あわないってのは、どんな所があわないんですか？

武田：地方の方が、やっぱり建物自体が小さいんで、ミニマルというか、ちょっと縮こまるような感じがしたんです。それで、写真を選び直した時に、あんまりミニマル感のあるものはずしちゃったんです。

鳥原：そうですね。これ、大体、四つ辻の対角を見ているケースが多いですね？その辺の場所のセレクトは面白いね。

武田：建物がスバッと単体で抜けるからですね。四つ辻って電線があまりないんです。神田とかだと消費者金融が密集しているから派手なビルが多いんだけど、道を挟んで電線が張り巡らされているんでこういう絵にはならないんです。秋葉原はびったりの光景が多いですね。割と派手な外装の店が点在してるんで、こういう風に抜けた感じがあるんですけど、同じ電気街でも、これが大阪の日本橋だと、直線

で道挟んでずらーっと店があるから、こういう風にはならないですね。もっとゴチャゴチャで、やっぱりこじんまりおさまっちゃうんですよ。

鳥原：まず、建物の規模が違うよね。だから、この写真の面白さは、やっぱりこのフレームでは捉えきれないところですよ。そこが、僕は一番面白いと思うているんです。

事務局：今の話の流れで、どういうところが選考会で評価されたかと言いますと？

鳥原：うん。やっぱりいま言ってたように、「東京でしかありえない光景」だというのがまず一つと、「ゴチャゴチャ感」。無秩序なんだけど、でも、ビルに視線が入っていくという中で、恐らく妙な秩序があるという事を感じさせるところとかね。山手線の中という事もあって、お金の流れがぐるぐる回っている所で、すごい栄枯盛衰がある場所なんだろうね。

武田：実際、一回撮った場所に、少しして同じ絵のつもりで撮り直しに行ったら、すでに看板変わってるんですよ。昔は、雑居ビルの窓ガラスに文字書いて「自分の事務所だ」っていう見せ方は、あんまりしてなかったんじゃないかと思うんですね。



もっと小綺麗だったというか。今は消費者金融なんかそうなんだろうけど、ここにあるっていう事を建物自体が物凄く主張してる。それって確かに建物の外装を有効に使っているんだけど、実はあんまり役に立ってないような気もするんです。

鳥原：役に立ってないってのは、つまり、いろんなものがありすぎて、逆に……。

武田：模様にしが見えない。日本語が書いてあっても、記号を見るってことだと思えますね。その店に行こうとする人って、たいていその店がその辺りにあるって知って行ってるはずなんで、外装が役に立っているとはあんまり思えないんです。だから外装が本当に広告として役に立ってるのか、ということを対比して見せるには、やっぱり絵の中に人は必要だろうなって思って、通りを歩く人も入れて撮りました。ですから、人の大きさを、割と揃えてるつもりなんです。

事務局：こういうものを、武田さんは肯定的に見てるのか、それとも、ある種批判的に見てるのかというと？

武田：見るという意味からすると楽しんでますよね。そこにある資金的な背景というのは、最初はあんまり見てない。やっぱり何枚か撮って、ある程度形になってきたのがきっかけとなって、シリーズとして撮ろうという気になってきて。それから意図的にそういう絵を集めに行くということだと思います。

デジタルカメラの利点

鳥原：デジタルカメラを使っていますが、例えば同じような作業を4×5を使ってとか、カラーネガを使うとかは、考えないですか？

武田：その選択はないですね。このカット前後で、同じ場所をすごくたくさん撮ってるんですよ。枚数が増えればそれだけ選びにくくなるんで、デジタルで撮って、ハードディスクに全部放り込んで、それをブラウズするっていうのが、一番やり易い。それに、4×5でこういうのをぎっちり三脚構えて撮っても、多分こういう絵にはならないと思うんで。

鳥原：ならないでしょうね。こう見ると、抜けが良くて、それぞれモノの大きさ

揃えてたりするんだけど微妙にゆがんでたり、どこかルーズな所っていうのが、必ずあって。でも、不思議なんだけど、ルーズな所が悪いかっていう事ではないんですよ。それも含めて今の写真だという匂いがする所が面白いんですよ。

事務局：「今の写真」というのは、どういう写真ですか？

鳥原：例えば今回のシリーズでいえば、5会期目の田村俊介さんもそうなんだけど、気軽にばんばん撮ってよし、みたいな感覚で写真を撮っている。すごいキメで撮らなくても成立していくし、これだけの数があることによって、撮った人間の妙な体質みたいなものも表現として出てくるというか。デジタルの時代だからこそ出てきた写真の傾向なのかもしれない。

武田：コストの面でもそうですが、とにかく闇雲にシャッター切って枚数多く撮りたい人って、デジタル選ぶと思うんですけど、そういう体質みたいなものがあるのかもしれないですね。撮る時にためらわなくていいので。4×5で構えてだと絶対撮れないですね。

鳥原：凄いお金があって、アシスタント何人使って良くて、やっぱりデジカメを選ぶ？

武田：ああ、多分、デジカメ選びますね。それは、自分にとって一番自然な目線で撮れるということと、撮ってる時のリズム感みたいなものが、多分あると思うんですよ。別の日に同じ時間、同じ場所に行っても、同じものは撮れないと思うので、撮りたいと思う時に反応できるという意味で、デジタルはやっぱりやり易いっていう気はしますね。

鳥原：なるほど。昔、自分でも写真を撮っていた時に、「失敗したら、アカン」とか色々なことを考えてやりましたけど、そういう事から解放されるってのは、すごくいいですね。

武田：それは大きいですよ。捨て駒と分かっても、ためらわずにシャッターを切れるというのは大きいですよ。僕は一回の撮影で2、3時間歩いて、多い時で一日5、600枚撮りますね。ただ、同じ場所で凄く粘る時もあるんで、同じカットを100カットっていう時もありますし。

鳥原：え、同じ時に？ 連写みたいにするんですか？

武田：連写に近い時もありますね。デジタルでないとそういう撮り方は、多分できない。人の流れを見て、それが自分が思ってる配置になるかどうか、さっきのカットでいたいOKだけど、もう少し粘ろうかとか、シャッター切りながら考えて。デジタルの場合は100、200撮っても最後に1枚選ばればいいやという感じで。

鳥原：その選ぶ時の作業って凄く大変じゃないですか？

武田：それはきついですね。撮った直後に見ると思い込みが激しいから、撮った日には露出の具合とかだけ見て、実際選ぶのは一、二週間たってからですね。大体、何撮ったかは分かりますから、動作の速いブラウザを使って、モニタの画面いっぱいに表示したデータをどんどんブラウザして見ていくんです。気になったものは、別のフォルダにコピーしておいて、迷ったものも、やっぱりコピーして。これが一通り終わったら、コピーしたものをもういっぺんブラウザして見るっていう流れで、だんだん削ぎ落としていきます。

鳥原：なるほどね。それでも、すごい時間かかる作業でしょ？

武田：かかりますね。だから、逆にデジタルにしてから自分の写真をもの凄く見るようになりました。紙焼きだったら、プリントするためにセレクトする時点で一つの意志が入るんで、焼いたものに対する思い入れは相当出てくる。それで、初めに焼いたものだけで組んでしまいがちなんですけど、デジタルだったら、僕は基本的にデータを消さないで、同じ条件ですぐに比較できるカットがたくさんある。それである程度方向性が見えてきた時に、もういっぺん撮り貯めたデータを頭から見直すんですよ。それはデジタルだからできることで、フィルムだったらそういうやり方はできない。

都心と郊外

鳥原：デジタルをやる前から、写真はやってたんですよね？

武田：一番最初は物心ついた幼稚園くらいの時（笑）。シャッター押すのが好きだったんで、父親の昔の6×6かなあ、おもちゃみたいなカメラでした。大学の時は写真部でしたが、社会に出てからはほとんど撮ってなくて。東京に転動してきてからですね、写真をまた撮り出して、面白いと思ったのは。反応できるものが多かったから数を撮るようになったんでしょうね。

鳥原：結局、それはやっぱり外部的な刺激からですよね？ 内発的に、こう写真を撮って残そうとか、表現してやろうとかは？

武田：ああ、ないです。そういうのは、全然ない。

鳥原：今回のものの以外に撮ってるテーマはありますか？

武田：郊外も撮ってるんですよ。土日に行くんですが、人を全然見かけないですね。休みだから当然お父さんもいて、お母さんもいるでしょうけど、でも、いない。子供がああいう所で遊んで、ちゃんと育つのかなという気もしますけどね。

鳥原：子供も家の中で遊んでたりするし、妙に物騒だったりしますよね。で、一方で東京を撮っていて。都心と郊外ってすごい違うじゃないですか？

武田：揺り戻しなんですよ。郊外撮っていて、ちょっと疲れてきたら、また都心に戻って行って、もうちょっと進むと、ここの路上を歩いている人のスナップショット。ずっとスナップショットを撮っている時もあるんですが、そういう時は「人を見たい」と思ってるんでしょうね。郊外撮ってる時は、家のものより、その辺の周りの空気とかを見てると思います。

鳥原：見るという事に対して、凄く冷静ですよね。例えば、人が見たいと思っていても、人に近づいて話しかけたりしないでしょ？

武田：それはないです。街でたまたますれ違った人に、そこまで興味は持てないですね。言われてみれば、風景撮ってる時も、そんなに変わらないという気はします。

鳥原：特に、郊外を撮るのも、都市を撮るのも違うということではないんだね。

武田：視点的にはないですね。結果的に何かまとまってきた時に、後付的に言葉にまとめることはあるかもしれないですけど、始める時にコンセプトを立てて、そこから撮りに行く、というやり方ではないですね。

鳥原：撮っていく中でヒントを得て、それをこなしていく、馴らしていくっていうやり方ですね。一つの事が明確になってきてから、加速度がついて制作していけるんですよね。すごい制作期間が短いんじゃないかと思うんです。

武田：今回の作品は、実質三ヶ月かかってないですね。ただ、そこに至るまでには、いくつかの断片みたいなものがあって、なんとなく断片で見えているものを意識しながら、選んでいく中で集中していくという感じですよ。

ドキュメンタリーで何ができるか？

鳥原：武田さんは、今、サラリーマンですけど、写真を撮るという行為と、サラリーマンという職業はどういう風に位置づけてるんですか？

武田：どっちも面白いですよ（笑）。幸い、今は別に嫌いな仕事をしている訳ではないし。全然違うものですけどね。ただ、写真を撮るにあたっては、仕事で外に出



てるから見えてくる部分もある。もちろん、仕事の時には撮れないので、仕事に見かけて気になった場所には休みの日に行きます。別にどっちに専念するという気持ちもないですし。リストラでもされれば考えるかもしれないですけど（笑）。

鳥原：これ専念しても食えないですよ（笑）。でも、それでいいと思いますよ。写真だけっていう事よりも、社会に対して他の切り口を持っていれば、写真にフィードバックできるし。写真の問題ばかりやってたら、何もかもフラットになっちゃうこともあるから。

武田：それは、写真を仕事としてる人がやればいいことで、僕は、自分の気になってるものを撮りたいだけですから。

鳥原：ある意味、現実と向かい合ってるドキュメンタリー写真家だね（笑）。武田さんのこういう作業があるから、やっぱり、今、ドキュメンタリーで何ができるか、みたいなことを考えますよね。昔は、例えばベトナム戦争とか、事件が起きている



現場に行っても撮ることが最もエキサイティングだったけれど、今はそういう現場に行こうと思っても自己責任とか言われて行けないし、撮らなきゃいけない理由もない。武田さんが撮っているような、変化が目当たりに見える日常的な場所の方がエキサイティングなのかもしれないし、ダイレクトに伝わるのかもしれない。

武田：そうですね。それに、今はすぐ映像がリアルタイムに見られる。昔は、見る側に届けるまでに撮影者の中で咀嚼する時間があっただけですね。だから、撮ったものに対してストーリー付けも自分でできただろうし、セレクトする余裕もあった。

鳥原：逆に、事件があった現場を後から取材するとか、後追いになってますもんね。写真の役割は変わってないと思うんだけど、写真家の役割は変わってきたと思いますね。

事務局：では、最後に、今回の展示はどのようにしようと考えてますか？

武田：とりあえずプリントのクオリティが維持できる限界まで大きくして見せようと思っていたので、一辺1メートルくらいで30枚くらい並べて見せたいですね。

鳥原：クールに、フラットな感じで見せるといいよね。この作業はずっと長く続けていくよりは、ある程度スパンを切って、見てった方がいいですよ。3、4年に1回。オリンピックの年にやるとか（笑）。

武田：今回撮影した場所を定期的に追っていくつもりはないんですけど、意識はしてなくても、違う場所でこういう光景に反応して撮っているということはあるでしょうね。

2004年6月8日（リクルートGINZA7ビル）